

第 44 回日本受精着床学会総会・学術講演会

生殖医療領域における箱庭療法の臨床的意義

～当院での箱庭制作の臨床的検討～

O-133

東京, 2026.7.30-31

田中久美子、森本義晴

HORAC グランフロント大阪クリニック

【緒言】生殖医療における心理カウンセリングでは、治療過程に伴う 喪失体験、反復する期待と失望、身体感覚の揺らぎ、自己否定感、他者比較による孤立感など、多層的で言語化の難しい情緒が生じやすい。これらは妻・夫それぞれが個別に抱えるだけでなく、カップル関係にも影響し、治療への温度差や相互理解の困難、関係性の断絶として現れることが少なくない。箱庭療法は 1929 年に Lowenfeld が考案し、Kalff がユング心理学を取り入れて発展した心理療法であり、日本では 1965 年に河合隼雄が導入され医療・教育領域で広く活用されている。近年は「箱庭表現法」として危機介入的にも応用され、1989 年には森本義晴が胎児とのコミュニケーションや不妊の心理支援に応用し、当院でも生殖心理カウンセリングに取り入れてきた。本研究では、箱庭製作が不妊治療中のカップルのコミュニケーション改善にどのように寄与するかを検討した。

【方法】当院でカップル箱庭製作を実施し、製作過程で示されたコミュニケーションや語り、象徴的表現、相互作用、関係性の変化を検討した。

【結果】製作前には「夫が何を考えているのかわからない」「話せません」「ケンカになります」といった語りが多くみられた。共同作業が進むにつれ、「パートナーの想いが伝わってきました」といった相互理解の回復が生じた。箱庭という象徴的空間は、前言語的・身体的記憶を外在化し、言葉では届かなかった、あるいは断絶していた不妊治療や不妊の体験を無理なく共有できるかたちで立ち上げる役割を果たした。

【考察】箱庭療法は、言語化されにくい体験へのアクセスを可能にし、カップルが互いの内的世界にそっと触れ直すことを助ける手段である。本手法には向き不向きがあるものの、治療過程で生じる行き違いや停滞に新たな変化の芽が生まれる契機となり得る。今後は症例を蓄積し、適応条件や介入の意義についてさらに検討を深めたい。